

2023年1月22日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「海人（^{うみんちゅ}漁師）の誇りを捨てたのではない」

聖書：マタイによる福音書4：18～25

当時、ガリラヤ湖の地域はローマ帝国の支配下にあった。漁師たちが獲った魚は全ていったん支配者側に収め、それから規定の量に達したところで一定の報酬が漁師たちに支払われるという仕組みになっていた。植民地であるがゆえにそのような状況下に置かれていた。福音書の時代のガリラヤ湖は、せっかく魚を捕っても自分の家族や地域の人々の口にはほとんど入らず、ローマの巨大な口の中に吸い込まれていく。ローマでは皇族や貴族たちが毎日のように酒を酌み交わし、酒宴を開き、満腹に食べ続けるという、飽食の限りが尽くされ、かたやガリラヤの漁師たちは自分の家族や地域の人々の腹に入る望みもなく魚をとり続け、けななしの賃金を報酬として与えられるだけ。そんな仕事に誇りがもてようか。

ヤコブとヨハネは船と父親を残して即座にイエスに従い、父親は文句の一つも言わなかったと、聖書は記すが、むしろ父ゼベダイは期待をもって送り出しさしたのではないか。イエスはガリラヤの漁師たちを弟子にしたが、しかしそれは、漁師よりも伝道者の方が仕事として尊いからだということではないはずである。イエスはガリラヤの漁師たちの置かれたやるせない状況を知り、彼らの見るからに充実感のないその姿を見たとき、彼らに語りかけずにはおれなかったのではないか。「わたしについてきなさい。人間をとる漁師にしよう」とあるが、原語には「とる」という部分はなく、直訳すると「人間の漁師にしよう」（田川健三訳）と訳される。「人間の漁師」、人間が人間として、誇りをもって生きる生き方としてあるべきことをここで教えているのではないか？

この後、イエスはペトロたちを連れて、ガリラヤ中を回って「あらゆる病気や苦しみに悩む者」に仕える歩みを始めて行く。人間が人間として生きることを手伝い、そのために語り、仕える人として、この弟子たちはイエスと共に働き始める。それは弟子たちにとって、自分自身が人間を取り戻していくことでもあったのであろう。

辺野古の海人も決して「海人の誇りを捨てたのではない」。国家に翻弄された状況の中で今があらうかと思う。本当ならウミガメが毎年のように産卵する浜、ジュゴンの泳ぐ海で、世界に誇れる大浦湾で、誇りを持って漁を続けたかったはず。その思いを踏みにじった国家の罪は重い。イエスの「わたしについてきなさい。人間の漁師にしよう」という言葉には、慰めと励ましの言葉に満ちている。（神谷）